

ナボコフ『ロリータ』は1950年代の性解放への反動か
象徴性と具体性排除の視点で作品を読むー

はじめに

ウラジミール・ナボコフ(Vladimir Nabokov, 1899-1977)の『ロリータ』(*Lolita*, 1955)¹という言葉聞いて普通の人がまず思い浮かべるのは、例の「ロリコン」、つまり「ロリータ・コンプレックス」という正式な名称ではないが、病理心理学の用語とも言えなくもない未成熟な少女への倒錯した偏愛を表わす言葉ではないだろうか。40歳を過ぎたハンバート・ハンバート(Humbert Humbert)という中年男の12歳の少女ロリータ(Lolita)への恋愛感情は、異常という言葉以外に形容の仕方が見つからない。ハンバートが愛する女性は「ニンフェット」(“nymphets”)(15)と彼が呼ぶ少女であり、彼はこのように説明する。

It will be marked that I substitute time terms for spatial ones. In fact, I would have the reader see “ nine ” and “ fourteen ” as the boundaries the mirror beaches and rosy rocks of an enchanted island haunted by those nymphets of mine and surrounded by a vast, misty sea. Between those age limits, are all girl-children nymphets? Of course not. [. . .] (15)

ここで私が空間用語を時間用語で置き換えていることに、読者はお気づきになるだろう。実際、「9歳」や「14歳」というのは、島の境界線を思い浮かべて欲しい。鏡のような浅瀬とバラ色の岩場がある魔法の島で、そこに私のニンフェットたちが住んでいて、霧深い大海に取り囲まれているのだ。その年齢制限の少女は全てニンフェットと言えるだろうか。もちろんそうではない。[.....]

抽象的な描写だが近寄りがたい禁じられた存在というイメージを持つことが出来るのではないだろうか。

12歳の少女と性交渉を持ち続けるこの作品は出版当時の性道徳の変化に何らかの影響を受けていると考えるのも不思議ではない。マリリン・モンロー(Marilyn Monroe)があからさまに表わすセクシャリティーや『プレイボーイ』誌創刊により不服従とセクシャリティーの勝利を宣言したのも1950年代の出来事である。『ロリータ』の出版年が1955年なら、この作品に時代の流れを読み解くのも不思議な事ではない。

1950年代の性解放への反動の書として、ジョン・カーロス・ロウ(John Carlos Rowe)

は、「ナボコフはハンバートの犠牲者に対して、我々の同情を引き出している。(そしてハンバート自身による大きな美意識の力の乱用に対して、我々の非難を引き出している)」、「Nabokov motivates our compassion for Humbert's victims (and our condemnation of Humbert's misuse of his considerable aesthetic powers) 」(268)と述べ社会的な関心からのアプローチを行っている。

そしてウィル・ノーマン(Will Norman)は、ナボコフの新批評の影響を述べ、「その学派とナボコフの美意識の間に過剰な平行を見いだすのは間違いだが、それでもある種の暗示的な共有された基礎がある」(“ Although it would be misleading to suggest too many parallels between the school and Nabokov's aesthetics, there is nevertheless some illuminating shared ground ”)(58)と文学批評理論の古典、新批評のアプローチの有効性を述べている。²

またロシア語の翻訳に言及して翻訳研究という比較文学的なアプローチをとっているアドリアン・ワナー (Adrian Wanner)は「潜在的ロシア性を有する元の『ロリータ』がロシア語への翻訳により、それがよりはっきりしてくる。ロシア語への翻訳は、ロシア文学の含意と言及という新しい状況を獲得し、その本を育てた言語の深く隠れたルーツに戻す事になるからだ」(“ the latent Russianness of the original *Lolita* becomes more explicit in the Russian translation, which acquires a new web of Russian literary connotations and allusions and thereby returns the book to the language of its nourishing, though deeply hidden roots ”)(461)と他言語への受容の観点から本作を批評している。

様々なアプローチに耐えうる『ロリータ』であるが、ナボコフが用いる隠喩、パン、緻密な描写を考えるならば、言葉への関心、テキスト主体のアプローチである新批評からのアプローチが本作の分析には適していると筆者は考えるのである。³ハンバートの罪と殺しの結果による彼の投獄というモラルの回復以上に、本作は意味を持っていると私は考える。性解放の時代性の反動として本作を読むのではなく、ハンバートの罰というモラル回復の意味以上の意味を見いだすのが、本稿の目的とするところである。ハンバートの犯したキルティ(Quilty)殺害の結果、彼がどのようなことを経験したかを明らかにしたい。

1 . 作品における象徴の重要性

「ロリータ、我が命の光、我が腰の炎、我が罪、我が魂」(“ Lolita, light of my life, fire of

my loins. My sin, my soul ”)(7)という曖昧な表現で始まる『ロリータ』は言語の隠喩やパンが特徴的であり、象徴を読み解くことは作品解釈の要であると思われる。主人公の中年男ハンバート・ハンバートという同じ音の繰り返しも一種の言葉遊びを連想させるし、ロリータという少女に関してロー(Lo)やローラ(Lola)、ドリー(Dolly)、ドロレス(Dolores)等の呼び名があり、言語そのものについての関心や言葉と実体の関連性の謎解き等を作品を読み込んでいく上で、読者に要求していると言えるであろう。

ハンバートが愛する事になるロリータとは、彼が昔出会って、死により失ったアナベル(Annabel)という少女のイメージから誘発されて、恋におちるようになるのである。記憶の中のアナベルは「愛する人間の顔の客観的で全く視覚的な復元であり、自然色で描いた小さな亡霊」(“ the objective, absolutely optical replica of a beloved face, a little ghost in natural colors ”)(10)というものである。「亡霊」という言葉を使っているように、ハンバートのアナベルの記憶はかなり曖昧である。実際に「自分の記憶の中の彼女の顔立ちは、数年前のロリータを知る以前に比べると、ずいぶんぼやけている」(“ I remember her features far less distinctly today than I did a few years ago, before I knew Lolita ”)(10)とハンバートは述べている。

ぼやけているイメージにもかかわらず、アナベルとロリータはそれでも重なり混ざり合うのである。ここではそれを説明した場面を引用してみたいと思う。イメージの融合をここでは説明している。

A little later, of course, she, this nouvelle, this Lolita, my Lolita, was to eclipse completely her prototype. All I want to stress is that my discovery of her was a fatal consequence of that “ pryncedom of the sea ” in my tortured past. Everything between the two events was but a series of gropings and blunders, and false rudiments of joy. Everything they shared made one of them. (42)

しばらくすると、言うまでもなく、彼女、この新星、ロリータ、私のロリータは彼女の原型をすっかり覆い隠してしまう事になる。強調しておかなければならないのは、彼女を発見したのが、私の苦渋に満ちた過去のあの「海辺の公国」の運命的な結果であるということだ。二つの出来事の間起こった全ては、手探りと失敗、そして誤った喜びの発生の連続に過ぎなかった。二つの出来事にはあまりにも多くの共通点があり、

一つになっていた。

アナベルとロリータという少女の諸相が融合し、過去と現在が溶け合っているのである。ここでは二人の区別が消失して、先に説明したハンバートの言うニンフェットという属性を帯びた少女像が浮かび上がってくるのである。アナベルがニンフェットであり、そしてロリータもニンフェットなのである。互いを結びつけるのはニンフェットのイメージであり、ハンバートが愛するのはロリータの持つこの属性という事が出来るであろう。

ロリータへの関心の発生が死者のイメージという曖昧さは、ロリータの実体を愛するというより、ロリータを通してハンバートの考える理想の少女を求めるといふ、いわばロリータが象徴的な役割を果たしている、と言えないだろうか。デール・E・ピーターソン(Dale E. Peterson)は作品中の象徴の精緻な読みの重要性について「平明で明らかなひねりや展開に思えるが、直接的なアレゴリーの形という単純さではないものに、注意深くそして正直であろうとする態度」(“ a willingness to stay attentive and honest to the plainly visible twists and turns that resist being simplified to the contours of straight allegory ”)(84)が必要と述べているが、ロリータ自身の存在についても、実体を求めるのではなく、属性という象徴の観点から求めている事は、ハンバートのこの発言で明らかであろう。「私はいわゆる『セックス』には一切興味がないのだ。そんな動物じみた要素は誰でも想像できるのだ。私を誘惑してやまないもっと大きな企ては、すなわちニンフェットの危険な魔法を一網打尽につかまえる事なのだ」(“ I am not concerned with so-called “ sex ” at all. Anybody can imagine those elements of animality. A greater endeavor lures me on: to fix once for all the perilous magic of nymphets ”)(151)。ロリータは象徴性を帯びているのである。

ロリータの母が死んでハンバートが最初にロリータを連れて行ったホテルは「魅惑の狩人」という場所である。このホテルの名前自体が少女に夢中になっている攻撃者としてのハンバートを連想させるものだが、このホテルの食堂の壁画についてハンバートが想像する場面をここで引用してみたいと思う。

There would have been a lake. There would have been an arbor in flame-flower. There would have been nature studies a tiger pursuing a bird of paradise, a choking snake sheathing whole the flayed trunk of a shoat. There would have been a sultan, his face expressing great agony(belied, as it were, by his molding caress), helping a

callypygean slave child to climb a column of onyx. [. . .] (152)

まず湖があり、炎の花に囲まれた園亭がある。自然風景もある。極楽鳥を追いかける虎に皮を剥かれた子豚をまるのみにして喉を詰まらせている蛇。スルタンもいて、大変な苦痛の表情を浮かべて(なぞるような愛撫とは裏腹に)、美しい尻をした子供の奴隷に手を貸して、縞大理石の柱を登らせるようにしている。[……]

極楽鳥を追いかける虎や皮を剥かれた子豚をまるのみしている蛇は、間違いなく12歳の少女を食い物にしているハンバート自身の姿と言えるであろう。⁴柱を登らせようとしているスルタンも、旅を続けながら自分の考えるよい場所へと、子供の奴隷を表わすロリータを連れ回しているハンバートと重なってくるのである。「大変な苦痛の表情」のスルタンは、ロリータをつなぎ止めておくために必要なハンバートの苦労やその他の精神的障害を表わしている。この想像上の壁画は、作品全体の特徴を表わしているハンバートの心象風景であり、象徴なのである。

L・L・リー(L. L. Lee)は、「ナボコフの作品では社会的な姓は曖昧である。なぜならナボコフは、はっきりした区別を表わす、そして恐らくは単純な常識という本当ではないカテゴリー分けを攻撃しているからだ」(“ Gender, in Nabokov’s work, is an ambiguous thing. It is ambiguous because Nabokov is attacking the clear, divisive, and perhaps untrue categories of simple common sense ”)(81)と述べているが、実はレイピストとしてのハンバート、そして義理の娘としてのロリータの役割は、リーの述べるようにはっきりとしたカテゴリー分けを示していない。被害者としてのロリータ自身もハンバートを性的に誘惑するという罪をこの「魅惑の狩人」というホテルで行っているのである。また少女への性行為という暴力を行っているハンバートも実は、ロリータに金を支払い続けたり、ちょっとした買い物へ行ったときでさえ厳しく問いただしたりと、束縛と同時にロリータへ強い依存の状態を示しているのである。⁵「私は弱く、賢明でもなく、すっかり女学生の私のニンフェットが、私に魔法をかけてしまった」(“ I was weak, I was not wise, my schoolgirl nymphet had me in thrall ”)(207)というハンバート自身の説明が彼の依存状態を説明しているのではないだろうか。レイピストと攻撃者、そして依存する者としてのハンバートはもちろん父親という社会的な男性の役割は果たしていない。ロリータも父親を誘惑する娘という社会的な女性の役割を果たしていないのである。二人の役割の曖昧さは、現実を想

定した状況とは違い非現実の特色を持っているとも言えるのである。父親と娘という本来あるべき姿の実体という即物性ではないのなら、二人の存在も壁画の描写と同じように象徴に近い意味を持たせてもおかしくはないのである。ニンフェットという象徴を追うハンバートのみならず、追われるロリータ自身もハンバートが理想とするニンフェットという象徴性を帯びていると言えるであろう。ニンフェットの象徴は双方向で作用しているのである。

ロリータの存在は死者アナベルに端を発する、実体に恋愛の根拠を置かないハンバートの求愛対象であり、象徴的存在である。「魅惑の狩人」のハンバートの想像による壁画は、一瞬の場面が作品全体のテーマと重なってくる象徴的場面である。『ロリータ』における主要人物ロリータの存在の特徴や作品テーマに関わる重要な場面の象徴性、親子の関係を否定しニンフェットの象徴で結びつけられるハンバートとロリータの現実感のなさ等、この作品では現実を超えた象徴性が重要な働きをしているのである。

2 . 現実と具体性の排除

作品の象徴の重要性を第1節で述べたが、この第2節ではそれと関連した作品中での現実と具体性の排除について考えてみたいと思う。象徴とは対象となる事物を暗に意味することであり、事物そのものを明示する事ではなく、現実性から距離を置くことなのである。ロリータの母シャーロット(Charlotte)とハンバートが結婚したのは、ロリータと接近したためであり、シャーロットに対して愛という感情は存在しない。シャーロットは邪魔な存在なのである。シャーロットを眠らせ、ロリータをレイプしようとするハンバートは以下のような危険な行為をシャーロットに行う。

Throughout most of July I had been experimenting with various sleeping powders, trying them out on Charlotte, a great taker of pills. The last dose I had given her (she thought it was a tablet of mild bromides to anoint her nerves) had knocked her out for four solid hours. I had put the radio at full blast. I had blazed in her face an olisbos-like flashlight. I had pushed her, pinched her, prodded her and nothing had disturbed the rhythm of her calm and powerful breathing. [. . .] (105-6)

7月のほとんどずっと私は色々な睡眠薬を実験して、薬を服用するのが好きなシャーロットにやってみた。一番最後に投与した薬は（彼女はそれを神経鎮静の穏やかな臭化カリウム錠だと思っていた）丸々4時間も昏睡状態にさせた。ラジオを最大音量でかけても、張形のような格好をした懐中電灯で顔を照らしてみても、突いても、つねっても、つまんでみても、穏やかな力強い呼吸のリズムは乱れなかった。[……]

睡眠薬を実験して人に投与し、昏睡状態にさせるという危険を冒しているのである。一歩間違えれば、死の危険すらあると言ってもいいだろう。ハンバートにとってシャーロットは、ロリータとの親密さを増すために邪魔な存在なのである。ハンバートにとって、「日常生活ではどうしようもなく下品な人間で才気も審美眼もない」（“an odious vulgarian in ordinary life, devoid of tact and taste”）(94)シャーロットは「優しい性格を偽って水入り瑪瑙の指輪に忍ばせた古典的な毒液か、愛情込めた死の媚薬を飲ませる」（“I might have hoodwinked my gentle nature by administering her some classical poison from a hollow agate, some tender philter of death”）(98)ほど憎んでいるのである。手段を選ばずにシャーロットを排除する姿勢は、エリザベス・W・ブラス(Elizabeth W. Bruss)の言う「ハンバートの狂気は実際、少女への曲がりくねった願望ではなく、自分の夢と接合しようとする自分勝手な試みにあるのだ」（“Humbert’s madness is not really a perverse desire for little girls but a willful attempt to copulate with his own dreams”）(34)にも通じるものであろう。

このような憎しみは、しかしながら世間の目に晒される事はない。ハンバートのロリータへの感情を知ったシャーロットは路上に飛び出し、車にひかれるという事故死の顛末をむかえるのである。憎しみという感情が明らかになるどころか、妻を失った哀れな夫という同情を世間から買うことになるのである。殺したいという憎しみは殺害という具体的行動となって表れる事はなかった。この意味で憎しみの感情は現実性を帯びることはなかったのである。そして憎しみの感情というハンバートの実際の心情は、同情を買うという憐れみという衣を纏う事になり、この意味でも感情の現実性は排除されるのである。作品の主人公の一人ハンバートが現実性の排除を特徴として持っているというのは注目すべき事柄なのではないだろうか。表面上の特徴、第一の感情は現実には結びつくことがなく、形を変えて進行していくのである。

ハンバートが求める現実とはロリータといつまでも一緒にいることであり、それゆえロリータが結婚した後でも再度の逃避行を促すのである。しかし、彼の求めるこの現実は、

ロリータを誘拐したキルティの殺害によって不可能になるのである。ポール・ヌボエ (Paul Neubauer) はハンバートにとってのキルティについて「彼の第 2 の自我、クレア・キルティ、対になる力をなし、「邪悪な肉体」の役割を割り当てられて、そして (キルト) でつぎはぎされた自我として現われる者」 (“ his alter ego, Clare Quilty, who appears as (quilted) patchwork of identities playing his counterforce and thus being assigned the role of ‘ evil incarnate ’ ”) (379) と説明しているが、確かにキルティの性的異常さはハンバートの少女を愛する性的嗜好の異常さとも通じるものであり、似通った存在、第 2 の自我と呼ぶのに相応しいように思える。キルティの性的嗜好の異常さはロリータが説明する、二人の女の子と二人の男の子、そして大人の男 3, 4 人を用意してみんなが裸で絡み合っているところを、年老いた女に映画に撮らせようとした (315) 等の言葉によっても明らかであろう。そしてロリータに対して、キルティも興味を持っているという点でも彼らは似通っているのである。

自分こそがロリータを幸せにするんだという身勝手な考えも彼らには共通している。キルティは「実際、なあ、ハンバート、君は理想の義理の父親ではなかったわけだし、かわいい君の被保護者を私が無理に仲間入りさせたわけじゃない。もっと幸せな家庭に引き取って欲しいと頼んだのはあっちなんだ」 (“ my dear Mr. Humbert, you were not an ideal stepfather, and I did not force your little protégée to join me. It was she made me remove her to a happier home ”) (343) と述べているが、ハンバート自身もロリータの母親やロリータの結婚相手に対しても似たような考え方を持っていたのは明らかではないだろうか。

自分と似通った存在のキルティを殺害する事は、第 2 の自我を消す事に表わされるように自分殺しの意味を持つのである。ここでキルティを殺害しているハンバートの様子を引用してみたいと思う。

His voice trailed off as he reached the landing, but he steadily walked on despite all the lead I had lodged in his bloated body and in distress, in dismay, I understood that far from killing him I was injecting spurts of energy into the poor fellow, as if the bullets had been capsules where in a heady elixir danced. (346)

彼が踊り場にたどり着いた時、声は次第に消えていったが、それでもまだ彼は腫れあがった体に撃たれた鉛をものともせず、着実に歩いて行った。そして私は絶望と失望

を覚えながら、殺すどころかあたかも弾丸が強力な若返りの妙薬を含んだカプセルみたいに、この哀れな男に生命力を注入している気になった。

殺してはいるが生命を与えている感覚というのは、生きているハンバートと死にゆくキルティの融合であり、撃たれて苦しみと恐怖を感じているはずのキルティと同じように、絶望と失望を感じているハンバートも、キルティとの融合が見られる。ハンバートはキルティを殺害しつつ自分を殺害しているのである。キルティを殺害した後のハンバートの感覚、「私は全身ともキルティだった。出血する前のあの取っ組み合いをした感覚が残っていた」(“ I was all covered with Quilty with the feel of that tumble before the bleeding ”)(349)という説明も両者の同一性を証明するものとして適切ではないだろうか。

ではキルティ殺害という自分殺しの意味する所は何であろうか。キルティが犯した誘拐という罪に対しての罰というモラル回復と同時に、自分と似た存在を消す行動でロリータにとっての恋人である自分自身の存在を消すのである。ロリータを得るという具体的目的は自分を殺すことで不可能になるのである。実際に殺害という犯罪によってハンバートは、警察によって捕えられ、ロリータを再び手に入れる事はなしえなくなるのである。結果的にハンバートは獄中で病死となり、ロリータも出産で命を落とす事になるので、二人は接点を持つことはないのだが、ハンバートは自らキルティという自分自身の分身の殺害によって、法的にも象徴的な意味でもロリータから自分自身を遠ざけるのである。ハンバートの自分殺しはロリータ獲得の具体性を排除する行動なのである。

ロリータに接近するための口実となったシャーロットに対しての扱いと彼女の死、そしてキルティ殺害の自分殺しという意味も、偶然や法、自己の消失によって現実を想定した意図は具体性を帯びることがなかった。ハンバートの具体性は作品中で排除されるのである。

結論

ハンバートの殺人という罪がハンバート自身にもたらす意味を明らかにするのが本稿の目的であり、ハンバートの獄中での死はモラル回復という1950年代の性解放に対する反動だけではないことを説明する狙いが本稿にはあった。第1節では作品中の象徴の重要性について説明し、現実という即物性とは遠い性格を作品が持っている事を明らかにした。

第2節ではハンバートの意図が具体的行動となってあらわれる事はなく、偶然やキルティ殺害の自分殺しによって自らの意図した具体性の排除をハンバートが行っている事を明らかにした。作品は具体性の排除の性格を持っているのである。

ロリータとハンバートの一緒に逃避行は娘と義理の父という立場を無視した未来と現実を考えない理想を求める探求の旅であった。ハンバートが獄中にあり、ロリータを失った後も彼の得られないものへの探求の姿勢は崩れない。第1節で説明した象徴の重要性がロリータに対しての態度に表現されているし、第2節で説明した現実という具体性は排除されているのである。作品の結末部分を引用してみたいと思う。

And do not pity C. Q. One had to choose between him and H. H. , and one wanted H. H. to exist at least a couple of months longer, so as to have him make you live in the minds of later generations. I am thinking of aurochs and angels, the secret of durable pigments, prophetic sonnets, the refuge of art. And this is the only immortality you and I may share, my Lolita. (352)

そしてC・Qを憐れに思わないでくれ。あいつかH・Hのどちらかを選ばなければならなかったのだし、H・Hが少なくとも2ヶ月ほど長く生きて、彼のおかげでお前が後世の心の中に生き続ける事を選んだのだ。今、私の頭の中にあるのは、絶滅したオークロスや天使、色あせない絵具の秘法、予言的なソネット、そして芸術という避難所である。そしてこれこそ、お前と私が共有する唯一の永遠の命なのだ。私のロリータ。

非現実の説明が並び、得られないロリータを探求する姿勢が見られるのではないだろうか。アナベルという死者のイメージに触発された、ロリータへのイメージ先行の愛は、獄中で死を迎えるハンバートにおいてでさえも、その性格は変わらないのである。⁶バーンド・クラーン(Bernd Klähn)は「ナボコフのハンバート・ハンバートは、始まったところで終わるのだ。自己同一性の転回に閉じ込められ、空虚な反復以外何も有していないのだ」(“ Nabokov’s Humbert Humbert ends where he started out: sealed into self-identical rotations, containing nothing but empty repetitions ”)(391)と説明しているが、クラーンの明らかにしていない反復とは、ハンバートの探求状態なのである。

キルティの殺害によって捕えられたハンバートは、得られないロリータを永遠の象徴と

して探求しながら死を迎えるのである。⁷ハンバートの殺人という罪の結果の投獄は、ロリータを得ることを不可能にし、そして象徴としての探求状態を彼に継続させるのである。ハンバートの殺人に対しての罰はモラル回復に主眼があるのではなく、探求状態の継続に主眼があると言えるのであり、1950年代の性解放の反動が主たる作品のテーマではないのである。死者の象徴として愛したロリータをキルティ殺害の自分殺しという、彼女の獲得の具体性を排除することによって、永遠に探求する存在としたハンバートである。本稿の問いへの答えはここにある。ハンバートの殺しという罪が彼にもたらしたのは、具体性を排除した得られない理想の探求状態の継続である。

主人公が自殺によって愛する女性との精神的合一を図ろうとする作品にドイツ文学、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテが書いた(Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832)の『若きウェルテルの悩み』(*Die Leiden des jungen Werthers*, 1774)があるが、得る事が不可能なものを死によって獲得するという姿勢は、この『ロリータ』にも通じるものがあるのではないだろうか。両者も現実という具体性を排除し、理想のイメージを死後に獲得する作品なのである。『ロリータ』は中年男性の少女への愛という社会的な非難を呼び起こし、世間を騒がせた作品であり、『若きウェルテルの悩み』は自殺者の増加という社会問題を引き起こした作品である。世間からの物議を引き起こした両作品の比較も興味をそそる研究ではなかろうか。

註

- 1 . 以下、『ロリータ』からの引用は Vladimir Nabokov, *Lolita*, Penguin Books, 2011 の版に拠る。
- 2 . ロシア出身のナボコフが新批評に影響を受けたのは不思議ではない。新批評の基となるロシア・フォルマリズムの動きが 1910年代、1920年代にシクロフスキー、ヤコブソン等を中心として盛んであったが、ナボコフがこの流れをくみ、アメリカにおいて新批評に興味を抱くようになったのは、ある意味当然であるかもしれない。
- 3 . 新批評が作品そのものだけを対象として他の情報を度外視する事ばかりが、このアプローチの特徴である、と簡単にしばしば説明されるが、新批評のアプローチ法の中でもシカゴ学派が、作品そのものだけでなく研究方法の多様性を持ち込んだ事を忘れてはならないだろう。
- 4 . 豚は、新約聖書の『ルカによる福音書』15章11節から32節に見られるように無知や淫欲、墮落の象徴である。蛇は当然、創世記におけるエデンの園でのアダムとエヴァを墮落させた生物であり、罪に陥れる生物である。ロリータとハンバートの姿と重なるのではないだろうか。
- 5 . 束縛の極端な形としてハンバートがロリータへ懲罰的にバックハンドの平手打ちを行う場面があるが、こうした暴力もロリータの心が離れていく理由に挙げられるであろう。
- 6 . 象徴としてのロリータの存在は、以下の場面でも明らかである。キルティ殺害後警察に捕まり護送を待つ間、子供たちの声を聞くハンバートは「ロリータの不在を絶望的なまでに嘆くのではなく、ロリータの声がその和音にないことを嘆く」(“ the hopelessly poignant thing was not Lolita’s absence from my side, but the absence of her voice from that concord ”)(351)のである。実体よりも象徴をハンバートは重視しているのが明らかであろう。
- 7 . ハンバートは知ることはないが、出産で命を落とすロリータの死もアナベルの死と重なり、この点においてもロリータの存在の永遠の象徴性を述べるのに都合がいいと思う。

引用・参考文献

- Bruss, Elizabeth W. . “ Vladimir Nabokov: Illusions of Reality and the Reality of Illusions. ” *Modern Critical Views*. Ed. Harold Bloom, Chelsea House Publishers, 1987.
- Klähn, Bernd. “ The Postmodernist Dialectics of Master and Maid: Vladimir Nabokov and Robert Coover. ” *Amerikastudien / American Studies*, Vol. 47, No. 3, Vladimir Nabokov at 100. 2002. www.jstor.org/stable/41157750. Accessed: 15 July 2018.
- Lee, L. L. . “ Vladimir Nabokov’s Great Spiral of Being. ” *Critical Essays on Vladimir Nabokov*. Ed. Phyllis A. Roth, Northeastern UP, 1984.
- Moser, Janet. “ Playing for Keeps: Using Nabokov to Teach Composition. ” *CEA Forum*, v40 n1 p1-33 Win-Spr 2011. <https://eric.ed.gov/?q=nabokov&ft=on&id=EJ985749>. Accessed: 23 August 2018.
- Nabokov, Vladimir. *Lolita*. Penguin Books, 2011.
- Neubauer, Paul. “ The Figure of the Fool in the Master’s Later Novels: “ Common dell’arte ” Adaptations in Vladimir Nabokov’s English Novels. ” *Amerikastudien / American Studies*, Vol. 47, No. 3, Vladimir Nabokov at 100. 2002. www.jstor.org/stable/41157749. Accessed: 15 July 2018.
- Norman, Will. “ Nabokov’s Dystopia: “ Bend Sinister ”, America and Mass Culture. ” *Journal of American Studies*, Vol. 43, No. 1 Apr., 2009. www.jstor.org/stable/40464348. Accessed: 15 July 2018.
- Oates, Joyce Carol. “ A Personal View of Nabokov. ” *Critical Essays on Vladimir Nabokov*. Ed. Phyllis A. Roth, Northeastern UP, 1984.
- Peterson, Dale E. . “ Nabokov’s Invitation: Literature as Execution. ” *Modern Critical Views*. Ed. Harold Bloom, Chelsea House Publishers, 1987.
- Pilfer, Ellen. “ Nabokov and the Art of Exile. ” *Critical Essays on Vladimir Nabokov*. Ed. Phyllis A. Roth, Northeastern UP, 1984.
- Quinn, Brian T. . “ Echoes of Lolita in Nabokov's The Enchanter. ” *Studies in English Literature*, Volume 67 Issue 2 1991. www.jstage.jst.go.jp/article/elsjp/67/2/67_KJ00006942566/_pdf/-char/en. Accessed: 23 August 2018.

Rampton, David. *Vladimir Nabokov*. The Macmillan Press, 1993.

Rowe, John Carlos. " " Reading Lolita in Tehran " in Idaho. " *American Quarterly*, Vol. 59, No. 2 Jun., 2007. www.jstor.org/stable/40068462. Accessed: 15 July 2018.

Wanner, Adrian. " LOLITA AND KOFEMOLKA: VLADIMIR NABOKOV'S AND MICHAEL IDOV'S SELF TRANSLATIONS FROM ENGLISH INTO RUSSIAN. " *The Slavic and East European Journal*, Vol. 57, No. 3 (FALL), 2013. www.jstor.org/stable/43857537. Accessed: 15 July 2018.

White, Edmund. " Nabokov's Passion. " *Modern Critical Views*. Ed. Harold Bloom, Chelsea House Publishers, 1987.